

NBC Plus+

vol.58

自分の生きる人生を愛せ。
自分の愛する人生を生きる。



なく、可能性にかける!

画一的な応答をする学生へのアツイコトバ

株式会社ジャパンビジネスラボ 創業者 杉村 太郎 氏

2011年8月20日。株式会社ジャパンビジネスラボ(東京都港区)創業者である杉村太郎氏が亡くなった。原発不明癌の告知を受けてから7年半が過ぎた頃だった。

日本で初めてのキャリアデザインスクール『我究館』、日本で初めての語学コーチングスクール『プレゼンス』を運営する株式会社ジャパンビジネスラボは、1992年に氏が設立した会社である。

大東京火災海上保険(現あいおいニッセイ同和損害保険)で人事部に所属していた当時、採用面接で画一的な応答をする大学生の言動に啞然としたのだという。「内定することが目的化してしまい、その先にある仕事や人生をどう輝かせていくのか、先を見据えることができていないのではないか…」マニュアル通りの回答を繰り返す大学生に、流れ作業のような採用面接。眼前に広がる光景とそれに対する自身の違和感に、杉村氏が出した答えは、働く意義や人生を通して社会に貢献し、実現したいことを徹底的に語り合い、本気で自己研鑽する場『我究館』の設立だった。

教育理念

結果に執着し、結果を出すことを通じて、
結果よりも大切な過程の尊さを伝えたい。
心を通わせ切磋琢磨する仲間の尊さ、その力の絶大さを伝えたい。
自信と誇りを育むことを通じて、自分と人と社会を愛する、
強く優しく高潔な人材を育てたい。
不可能はないことを伝えたい。

Philosophy of Education

Process for the best result
Tight bond which makes it happen
Self Confidence and Pride for the better world
All's for your Peace of Mind and the World Peace

杉村 太郎 すぎむら たろう

(1963年11月10日 — 2011年8月20日)

慶應義塾大学理工学部管理工学科卒。米国ハーバード大学ケネディ行政大学院修了(MPA)。ハーバード大学元ウェザーヘッド国際問題研究所客員研究員。住友商事から損害保険会社にて、経営戦略と人材育成・採用担当を経て、1992年にキャリアデザインスクール「我究館」、2001年に英語&中国語コーチングスクール「プレゼンス」を設立。主な著書に1994年からロングセラーとなっている『絶対内定』シリーズ(ダイヤモンド社)、『アツイコトバ』(中経出版、電子書籍版はダイヤモンド社)などがある。



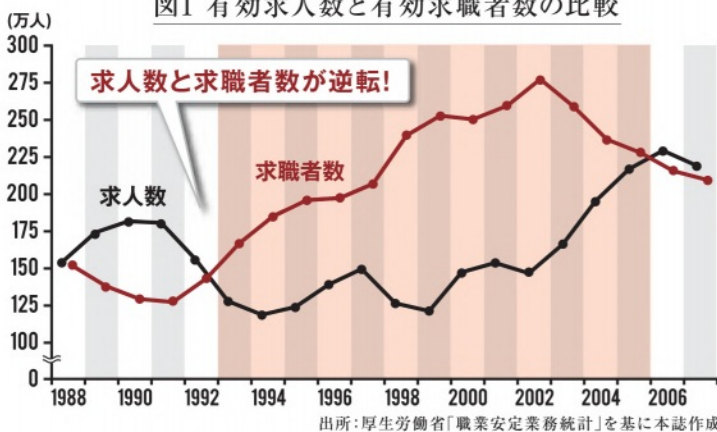


確率では

1992年という年。

1990年1月より株価や地価などの暴落が起こり、「バブル崩壊」と呼ばれる様相を呈し、翌1991年2月を境に安定成長期が終焉した。景気が後退するなかで、バブル期の過剰な雇用による人件費を圧縮するために、企業は軒並み新規採用の抑制をスタート。さらに、同時期の政界では短期

図1 有効求人数と有効求職者数の比較



間で枠組が著しく変動する大混乱のさなかにあったため、政府が景気対策に本腰を入れて取り組むことが困難な状況であった。金太郎館のように画一的に応答する採用面接時の大学生に違和感を持った杉村氏が『我究館』を設立した1992年は、採用市場における売り手市場の最後の年だった。翌1993年からはゆうに13年もの間、俗に言う就職氷河期がスタートする。(図1)

杉村氏は、そうした時代の到来を予見していたのかもしれない。買い手が優勢となれば学生の焦りは増し、より一層「内定することが目的」となり、「履歴書やエントリーシート」の書き方、面接の受け方といったテクニク「の奪取に余念のない学生が増殖しそうだ。むしろそうしたスキル面にこそニーズがあり、ビジネス(お金)になりそうに思えてしまうのは凡人ゆえ」。杉村氏は「だからこそ」とばかりに「学生それぞれが自分自身を徹底的に見つめ、追求し、自分を知ること。強い意志を持って、自分の弱みを強みに変え、自分の人生を通じ社会にどのように貢献していきたいのかを仲間と語り、実際にアクションに移していく」というアプローチを貫いた。

履歴書を書く、面接を受ける、内定をもらう、入社する、という断片ではなく、社会に出ること、人と関わること、働くこと、貢献しようとする、こと、そうした連続性、しいて言えば生きていくことそのものへの示唆だ。

創業当時は数えるほどであった仲間も年を追うごとに増え、



「我究館」5期生卒業式

2016年10月現在、「我究館」を
巣立っていった卒業生は、24期
8200人を超える―。

就職することは当たり前―。

そうかもしれない…。けれど、最
初のキャリアを描く時―、その先
ゆうに40年を超える「職業人」とし
ての人生や、仕事を通して綿々と
広がる人との関係、ひいては自分
自身との向き合い方を、ゆっくり考
えてみたり、誰かと対話してみた
り…そんな時間の使い方を、読者

はしたことがあっただろうか。

弊社副社長の野呂がジャパンビ
ジネストラボ様の経営支援を行って
いる。弊誌にご紹介する企業様を
探していたところ、同社が目ま
しい業績改善をしているとの話を
聞きつけ、早速掲載許可をいただ
くためにご連絡した。どうしても
取り上げたかった理由は、業績改
善が著しかったこともあるが、私
自身が同社のビジネスやその根底
にある考え方に非常に共感したか
らである。

1993年を底として景気がゆ
るやかに回復し、1997年新卒
の就職状況はいったん持ち直した
が、消費税引き上げなどの緊縮財
政に加え、1997年夏のアジア
通貨危機、不良債権処理の失敗か
ら1997年下半年から1998
年にかけて大手金融機関が相次い
で破綻したことなどで景気が急速
に冷え込んだため、再び就職状況
が悪化。

この時期は、求人数の大幅削減
のほかに、企業の業績悪化や新興
国との競争激化によって新卒を企
業人として育成する余裕がなくな
り、現場に即投入できる「即戦力」
を新卒に求める風潮が現れた。こ

れにより、雇用のミスマッチが発
生し、単純に求人数が増えても失
業率が下がりにくくなり、収入と
生活の安定を求めて本人の能力や
専門知識とはかけ離れた職場に否
応無く入らなければならなくな
り、短期間で解雇に追い込まれる
状況が発生した。

また、大卒者の就職についても、
1996年に就職協定が廃止され
て以後は企業が優秀な大学生を囲
い込むべく青田買いが発生し、こ
うした環境の変化により多くの大
学生に混乱と過重な心理的負担を
与えることとなった。

このような背景があり、有効求
人倍率は1993年から2005
年まで1を下回り、新規求人倍率
は1998年に0.9まで下がっ
た。また、バブル期に比べて、新卒
者が困難な就職活動を強いられた
ため、フリーターや派遣労働といっ
た社会保険の無い非正規雇用(プレ
カリアート)になる者が増加した。

就職活動体験記

私が就職活動をした(いや、しな
ければならなかった)時期は、この
就職氷河期だった。しかし、大学

在学中は一度グループ面接なるも
のを受け、一度就職フォーラムに
参加したくらいで、そのほかは一
切活動らしい活動をしなかった。
友人たちがリクルートスーツを着
て、たまにしか学校に来なくなっ
てからも、「内定キターー!」と
抱き合って喜び始めてからも、私
には一つたりとて、焦りというも
のがなかった。

お金があったわけではない。継
ぐべき家業があったわけでもな
い。もちろん、結婚して専業主婦、
なんて選択肢は微塵もなかった。
活動しなかった理由はただ一つ。
「リクルートスーツを着ることが
嫌だった」。当時の私にはそれが
「滑稽」に思えた。自分のいいとこ
ろ・悪いところなんて、とってつ
けたような質問に答えることも、
夏場に塩の噴いたスーツに身を包
み、汗だくで都内を歩き回る学生
も、グループディスカッションで、
リーダー役とか調整役みたいな
役々を演じようとする学生も、
「…気持ち悪っ!」と思っていた。

そんな私が友人に誘われ一度だ
け参加した就職フォーラムは池袋
のサンシャインが会場だった。十
数年も前のことだが、あの日の光

景は忘れられない。

前の晩、私はその友人たちと友人のバイト先であるメキシカンバーにいた。母を亡くした頃に支えてくれた彼女たちは、気の置けない仲間だ。お酒も覚えたてだったが、(正直イケる口で)無鉄砲な私は、たまたまカウンターの隣に座った年配のサラリーマンに、シヨットガンの勝負を挑み、大勝した。その晩は友人宅に泊まり、フォーラムの朝を迎えた。

参加を渋る私に、カッターシャツと黒のパンプスを指し出し、「ほら、着替えて」と友人たち。明るい茶色の髪は、まとめるように促されたが、丁寧に断った。チャコールグレーのパンツは自前。リクルートっぽくないスタイリッシュな感じが気に入って買った。

シャツを着てみる。ボタンをすべてしめるように言われるが、まとも断る。そして、鏡に映る自分がなんとなくしっくりこず、若干の照れもあって、結局グレーのカーデガンを羽織った。

電車に乗る。真っ黒な髪に真っ黒なスーツ、真っ黒な靴と靴をまとう友人たち。頭のでっぺんからつま先まで、リクルートコーデは

一寸の迷いもなくバッチリきまっている。一方、ハイトーンに染まった前下りのボブに、ボタンを二つ

空けたシャツとたつぷりとしたカーデガン姿の私。目的地が同じだとは、誰も思わなかっただろう。

リクルーターに好奇の目を向けるのは私だけのようで、なんだか彼女たちは世間に「就職活動中のねーがんばってねー」とあたたかく見守られ、優しい視線を送られているように見えた。彼女たちを見て社会人の先輩たちは「あら、もうそんな時期なんだ」と季節の風物詩を見ているかのようにつぶやき、ほほえましく、そして懐かしく眺めているようだった。

好奇の目を向けられたのは、まぎれもなく私のほうだった。サンシャインは黒づくめのリクルーターがごった返し、超満員。少なくて見積もっても1千人はいた。当然、茶髪にジャケットナシのカーデガン女子は、私ひとりだった。

「あ、●●●ってどこですか？」主催者側のスタッフに間違えられ、リクルーターに声をかけられることしばし。だだっ広いスペースにブースがひしめき合う会場には一歩も足を踏み入れず、外で

一服しながら友人たちを待つことにした。

黒づくめの集団には圧倒されたが、私が感じたのは「焦り」ではなくそれまでと同じ「違和感」だった。そして、得も言われぬ「嫌悪感」を増幅させていった。この日を境に大学の就職支援室にも一切足を向けなくなった。

専門学校をたたくてみたり、一人旅に出たり、卒業後も職の定まっていない私はモラトリアムを延長。社会人一年目を苦しみなから送っている友人たちをよそに、食後の昼寝のような生活を延々と送った。

大学の恩師や親と同世代の学友に触発され、ようやく「就職先を探そう」と重い腰を上げたのは、同級生が統々と「会社辞めようかな」と言い出した頃だった。今考えると、本当にグサイ若者だが、これが私の就職活動体験記。

「自分を見つめる」——そういうことから私は逃げていた。私がバカにしたたくさんのリクルーターは、**働くことは自分自身を見つめ続けること**だと、就職活動の中

でそのことに気づいていたかもしれない。「自分自身を徹底的に見つめ、追求し、自分を知ること。強い意志を持って、自分の弱みを強みに変え、自分の人生を通じ社会にどのように貢献していきたいのかを仲間と語り、実際にアクションに移していく」という杉村氏の言葉に、頭を強くぶつけたような感覚を持ったのが、今回同社をご紹介したいと思った最大の理由だ。

さて、亡くなる前、杉村氏は貴子夫人に「やりたいことは、次々としてきてきりがないけれど、やり残したことはない」絞り出すようにそう言ったという。

47年間の彼の生き様に、多くの若者がシンパシーを感じ、突き動かされた。現在の同社の役員は、我究館やプレゼンスの卒業生だ。

毎年、命日である8月20日になると、ジャパンビジネスラボの社員は杉村氏の講演VTRを観て、会社の軌跡を振り返る。そして、杉村氏の好きだったひまわりの花を飾る。

彼のイズムは、彼を知る人々によって「永遠」に生き続けている。

る女性の条件とは

株式会社ジャパンビジネスラボ 代表取締役 杉村 貴子氏

2016年9月7日、中目黒で開かれた「働く女性のキャリアデザイン」をテーマにした講演会に、杉村太郎氏亡きあと、同社を牽引する杉村貴子社長（以下、杉村社長）の姿があった。30分という短い時間ではあったが、現在進行形の彼女の生き様は、多くの働く女性を奮い立たせる内容だ。今号はその講演を抜粋しながらご紹介したい。



杉村 貴子 すぎむら たかこ (1974年7月25日ー)

- 1974年 東京都生まれ。
- 1993年 青山学院大学経済学部入学。第37代ミス東京選出。
- 1994年 東京都 東京商工会議所より感謝状を授受。
- 1995年 ミス・ユニバーシティ日本代表選出。テレビ朝日アナウンス部所属ウェザーメイツ。
- 1997年 日本航空株式会社入社。キャビンアテンダントとして勤務。
- 1998年 杉村太郎と結婚。
- 2000年 杉村のハーバード大学ケネディスクール留学に伴い渡米。
- 2003年 帰国。BS朝日キャスター就任。生活経済ジャーナリスト／証券アナリストとして執筆活動。
- 2007年 株式会社大和総研入社、調査本部配属。
- 2011年 株式会社ジャパンビジネスラボ監査役に就任。
- 2013年 同社取締役に就任。
- 2014年 同社代表取締役に就任。現在に至る。

自立す



(上)「プレゼンス」「我究館」講義風景/(左下)OB講演会/(右下)杉村社長ご家族写真

私たちは、人と真剣に向き合うことで「その方の人生を輝かせ」その輪を広げることで「世の中を、より良い方向に導く」ことをミッションとしており、運営する「我究館」『プレゼンス』は現在28800人も**の卒業生を輩出するまでになりました。**

年齢は42歳。寅年、しし座のA型です。「貴子さんを夫にしたい」と言われることも度々あり、結構男性的な面もあるのかもしれない。そして、16歳の長女と、5歳の長男をもつ二児の母です。今は、若いママとパパに交じって奮闘しています。

そんな私ですが、42年の人生を振り返り、その過程で感じてきた「女性の自立」について、お話しさせていただきます。

私は、1974年、杉並区荻窪に生まれ、育ちました。小学校6年間にはショートカットで、ピンクのワンピースを着て薬局に行っても、カウンター越しの薬剤師さんに、「ほく」と言われるほどボーイッシュだったらしく、運動会でも副応援団長として旗を振り回しているような活発な子供でした。

高学年になると、周りの影響で

塾通いが始まり、受験戦争に突入。中学から青山学院に通い、中学では水泳部キャプテン、高校ではバレー部のマネージャーをするなど、今思うと、温室で青春時代を過ごしたように思います。

**答えはいつも
「YES!」「YES!」「YES!」**

大学一年の夏休み、大ケガをした犬の手術代を工面しようと、アルバイトを掛け持ちするようになりました。早朝はファーストフード店、昼はカラオケ店、夜は小学生向けの塾講師。

ある日、塾講師の休み時間、気分転換で、近くにあった本屋さんにふらっと入ったんです。そこで手にしたのは、バイト雑誌でした。ぺらぺらとページをめくっていくと、「東京都のボランティア募集」という、なんだか新鮮な文字が目にとまりました。「面白そうだな」と、電話番号だけ記憶して塾に戻りました。その電話番号を間違っ

て覚えていたら、現在の私の人生はありません。
次の日、メモした電話番号にかけてみると東京都生活文化局にかかりました。「ボランティアに応募し



杉村社長 講演会の様子

たい」と言うと、「締め切りが迫っているので、速達で、履歴書と写真と作文を送ってください」とのこと。言われるままに、書類を送りその後、一通の封筒を受け取りました。そこに書かれていたのが、「東京都と東京商工会議所主催の『ミス東京』コンテストに応募いただき有難うございました。」そして、「一次審査通過」の文字。私はここで、初めて何に応募したのかを知ったのです。本当に、「木を見て森を見ず」です。当時、大学一年生だった私は10月1日の都民の日を機に、ミス東京に選ばれました。想像もしていなかった数々の経験に触れ、出会いがありました。

年間150件程度の行事。例えば、交通安全運動、納税週間、覚醒剤防止キャンペーン、さらには、友好姉妹都市を訪問したり、晴海に大型客船が到着する度に、振袖を着てお出迎えに行ったり、活動は多岐にわたっていました。

そんな貴重な経験をする中で、私は自分の苦手なことにコンプレックスを感じるようになってきました。

それは二つあり、一つ目は英語。

外国人のお客様に説明できない自分を、もどかしく感じていました。それからはアルバイトでお金を貯めては、長期休みに、アメリカの語学学校に短期留学する費用の足しにしました。

そしてもう一つが、人前で話すこと。自分の鼻にかかったような声も、好きではありませんでした。

東京都の活動では人前で話す機会も多く、その度に緊張していたのですが、あるイベントで突然、メイクが回ってきたんです。上手に話せない分、とにかく、明るく大きな声で挨拶をしました。ここで、私の運命を変える恩師との出会いがありました。元アナウンサーだった方が、声をかけてくれたのです。「あなたは、とてもいい声をしている。鍛えれば、もっと素敵な声になると思うけれど、勉強してみませんか？」

自分の声にコンプレックスを持ち、人前で話すことが苦手だった私には、「YES」か「NO」二つの選択肢がありました。その時、私はとっさに「ぜひ教えてください」と言っていました。なぜかわかりません。

ただ、いつまでも、いやだ、好きじゃない、と思っっている自分こそが、嫌だったのかもしれない。それからの私は、先生の自宅で毎週開かれている大学生の勉強会に通うことになり、「あいうえお」の基礎から教わることになりました。

東京の活動が終わって数ヶ月経過した頃、先生のとこに、東京モーターショーの補欠オーディションの話が来ました。予定されていたナレーター的女性が妊娠されたとのことで、急遽代わりの子を見つけなければならなくなった。できれば、その女性と背丈格好が似ている方がよい、という内容でした。先生にそつと背中を押され、受けてみたオーディション。

私は偶然にも、その女性と似ていたらしく、選ばれました。大学3年の夏休み、ほぼ毎日、電通の研修所に通いました。プロのナレーターの方たちは、セリフをどんどん暗記していく中で、私は一向に覚えられない。見かねた先輩が、セリフをテープに録音してくれたり支え助けられながら、何とか本番を迎えることができたのが正直なところだ。

11月の一ヶ月、うがい薬を片手に、ノースリーブで話し続け、自分の喉が鍛えられてきたなという感覚を覚え始めた頃、私は話す仕事に興味を持つようになっていました。その後、テレビ朝日アナウンズ部がトライアルで始めた、大学生のお天気お姉さんチームに採用され、新人アナウンサーに交じって研修を受け、「やじうま」という番組でお天気予報を担当させてもらうことになりました。

ここでもまた多くの失敗もしましたが、今思えば、一歩踏み出したことで、世界が広がり、経験の数だけの失敗もりましたが、その度に、周りに支えられ、強く育ててもらっ



たように感じています。

せつかくのチャンスが来た時には、極力「NO」と言わず、むしろ苦手分野に挑戦していく姿勢。それが、自分の可能性を広げる、近道なのではないかと思っています。

人生と転機 — 就職・結婚 —

そして就職活動。私はこの時、テレビ局で仕事をしたいという気持ちも持ちつつ、違う世界に飛び込む選択をし、航空会社に就職しました。

その後、身体を壊してしまった同期が、今後のキャリアについて悩んでいる姿をみて、大学時代に数回会ったことがあった、我究館の杉村太郎さんならきっと彼女を助けてくれるかもしれないと、連絡をとったことがきっかけとなり太郎さんと意気投合、結婚することになりました。

太郎さんの夢は、「世界をより良い方向に導く」こと。学生時代に、太郎さんは父親の仕事のサポートでアジア貧困層への支援に携わったことを機に、世界から弱者を一人でも減らすためには、教育の力

が必要だと考え、人を育て、彼らと世界をより良い方向に導いていきたいとアツク語っていました。

私も、「彼と一緒にその夢を実現したい」と真剣に思うようになっていき、彼もまた、世界で同じ方向を向いている仲間と繋がってきたいと、留学を考えていました。経営者の留学、一般的には難しいことだと思えますが、私は、それをリスクとは感じず、むしろ必要だと感じ、全力でサポートして、夢を絶対に実現させようと思っていました。

新婚でしたが、太郎さんは、寝ても覚めても耳にイヤホンをしてヒアリングの訓練。外食する時も、家の中でも、寝ている時も。会話がほとんどなくても、今はそういう時だと、彼をサポートすることに、迷いも不満もありませんでした。

— 意志をもって主体的に生きる —

そんなある日、太郎さんの父親がフィリピン大使館でのパーティーに招待され、私は太郎さんの代わりに、父に同行することになりました。彼の名刺をもって、「今日は代理で来ています」と、挨拶をし

ていた時、女性大臣の姿が見えませんでした。

女性としてご活躍されている大臣と是非お話がしてみたい、思い切ってご挨拶をしてみました。『夫の代わりに来ています。云々…、これからアメリカに行く予定で』と。すると大臣は、とても優しい口調ながら、こう言われたのです。

「素晴らしいですね。ところで、あなたは何をされているんですか？」

私は言葉が見つかりませんでした。一生懸命生きている自覚はありました。でも、自分が主體的に何をしているのか、説明できなかつたのです。

私は気付きました。太郎さんの夢と一緒にかなえたい、それは素晴らしい。でも、私も、意志をもって、主體的に、生きていかなくは。

当時お腹にいたあかちゃんをアメリカでしっかり育て、太郎さんのケネディスクール入学を全力でサポートする。そして帰国したら、今度は、私自身が意志をもって主體的に生きていこう。

あの時にこんな意識ができたのも、大臣のあの一言があったから

だと感謝しています。

その数ヶ月後、まだ、ケネディスクールの切符を持たない私たちは、夢をかなえるため一歩を踏み出しました。絶対未来は開けると信じ、大きな登山用リュックを背負って、6ヶ月の娘を抱っこしながら、私たちは渡米しました。

人生と転機

―甘えからの脱却を目指す―

アメリカでの生活は、三年と決めていました。期間限定だからこそ、思い切り満喫しようと思っていました。

しかし、現実には厳しかった。観光客とは全く違う。知り合いも、友達も誰もいない。孤独な世界。ゼロから生活基盤を作るのは大変でした。まず、銀行口座さえ、なかなか開けない。

最初の半年、太郎さんはケネディスクールへのアプライに必死でした。背水の陣だったと思います。アプライ後は、東京の会社のサポートで月の半分以上は帰国し、2001年、無事にケネディスクールの合格通知を受け取ってから入学するまでの間、勉強方法を体系化する



ハーバード大学卒業式

たスクール「プレゼンス」の設立と本の執筆に、慌ただしい日々を送っていたようでした。

私と娘は、NYで毎日カレンダーにバツ印をつけ、太郎さんの帰りを待っていました。念願のボストンに越してからも、益々忙しくなる夫。

そんな中、911が起こり、疲れでうたたねしボヤ騒ぎを起こしたり、娘が目の上を切る怪我をした

こともありましたし、もらい事故の後処理や、救急車にも乗りました。トラブル多き、珍道中のような日々でした。

太郎さんは、図書館を幾つもはしごする程、勉学に打ち込み、2003年夏、無事に、A.L.L.Aの成績で大学院を修了し、日本に帰国となりました。私はとていまして、日本に帰ったら、こうしよう、ああしよう、と多くを夢見、

放送業界の門も叩きたいと思っていたので、以前学んだ発声練習や、新聞を購入しては、原稿読みの練習などを続けていました。

日本に帰国後、娘を幼稚園に入れ、早速、就職活動を開始。しかし、現実とは甘くありませんでした。

そんな矢先、私は太郎さんと大級の夫婦喧嘩をしました。いま思うと、私に余裕がなかった、キャパシティが狭かったとでもいいかもしれません。その時、私は28歳でした。

もう家には戻らないと決め、実家に帰りました。実家に帰ってきたものの、これからどう生きていくのか。どう、子供を育てていくのか。考えれば考えるほど、不安になりました。

一時的な感情で家を飛び出してきたものの、私にはできないことばかり、痛いほどに感じました。当時の私の心境はこうです。「全力で走ってきた。家族で掲げた目標に向け、全力で家族を支えてきた。しかし、わたしは、ひとりになって、何ができるのだろう。子どもは育てられるのか、年を取った親に迷惑をかけずにできるのか」みんなが笑顔になるイメージが、一切わ

いてきませんでした。太郎さんを支えていたようで、実は、私が支えてもらっていたことに、大きく気付いた瞬間でもありました。

あの時、大臣に聞かれて言葉が見つからなかったのは、私は、覚悟をもって、主体的に、家族を支えているとは言えなかったからなのではないでしょうか。自ら飛び出したことで、等身大の自分を知り、「まわりを不幸にするような意志は、私が本来望んでいるものではない！今度こそ、主体的に生きていこう！」そう心に決めて家に帰りました。

しばらくして、テレビ朝日のアナウンス部に挨拶にいくと、お世話になったアナウンサーから、「アナウンスの仕事がしたいなら、こ



の前できたアナウンサースクールに行って勉強してみてもどうか」と言われました。週数回、夜のレッスンの通えるだろうか。また、基礎からもう一度、やり直すのか。さりげなく両親に相談してみると、「それはチャンスじゃないか。プランクがある貴子に勉強してみたら、と言ってくれるのは有りがたいことだから、是非やってみた方がいいよ、その間、愛莉ちゃんは預かるから」こう背中を押してくれたのです。

私はそれから数ヶ月、スクールに通い、そこで想像以上に多くのことを学びました。基礎を学ぶことが、自分の自信にもなりました。基礎クラスから継続し、中級コースに進むにつれ、スクールにくるオーディションの話もいただけるようになり、短いナレーションの仕事から、徐々に経験を増やしていききました。

そして、BS朝日のニュース番組のオーディションを受け、念願の報道番組に就くことができました。年は重ねていましたが、経験は圧倒的に少ないという負い目もあったので少しでも経験を積ませてもらいたいと、報道センターに

いることも多く、少しずつ顔を覚えてもらうようになりました。幼稚園に娘を迎えにいった家のかぎを開けた瞬間、携帯がなり、「今どちらですか？」と聞かれて、「すぐ伺えます」と言って、娘を連れて報道センターに急行するほどでした。そんな感覚が自分ではとても楽しかったし、少しずつ可能性が広がっていく感覚が、何より嬉しくて仕方なかったのかもしれない。

そんな時、フリーアナウンサーの友人から雑誌インタビューの仕事を代わりにやってくれないかという話がありました。もちろん、答えは、「YES!」。それから数回、インタビューに同行したところ、「記事を自分で書いてみないか」という話になったのです。私にとって、未知の領域。しかし、ここでも「ぜひ、やらせてください」と言っていました。

私の中で、よほどのことがない限り、答えは「YES!」。

こうやって私は、引出しの数を増やしていったのかもしれない。しかし、引出しの数より、自らの意志で、主体的に一步を踏み出すことに大きな意味があるので、はないかと思っています。

人生と転機 ―信じる力から生きる力へ―

私は幼い頃から、比較的、マイペースな子だったようです。家族も、一回りゆっくり成長する私を見守ってくれていたように記憶しています。だからか、目的地に到着するには、別に特急に乗らなくても、各駅だつて、時には乗り換えたつていいと考えていました。多くの景色を見ながら、目的地に着けるなら、それもまた楽しみなのではないかと。私はマイペースに、自分のキャリアを積み上げていくことに、喜びを感じていました。そんな時です。青天の霹靂でした。太郎さんが、癌と告知されたのです。

原発不明癌、今まで聞いたことのない病名でした。癌の原発は見つからないのに、転移だけが広がっていく。目の前が、一瞬で真っ暗になりました。

彼が私に心配をかけまいと精一杯努めているのが、痛いほどわかりました。ただ、癌とわかってからは、専門医を探し、セカンドオピニオン、サードオピニオンを聞いて

方針を決め、それからは、入院、手術、抗がん剤治療、リハビリ。立ち止まって考えているような余裕は一切ありませんでした。

「なぜ、これからという太郎さんが、癌になるのか」：やりきれない思いで、押しつぶされそうでした。しかし、ここで私が氣力を失ったらどうなるか。太郎さんも、悲しむだろう。娘も、不安だろう。

今の私にできること、それは治ると信じて、信じぬくこと。そして、今、私ができること、やるべきことを、確実にしていこう。私は、太郎さんは必ず治る、完治させると信じ、そのように太郎さんにも、娘にも接するようになりました。一方で、娘を育て上げることへの覚悟もしました。

この時、私の仕事内容が、報道の中でも経済寄りになっていたこともあり、思い切つて強みをより活かしていこうと、アナリスト資格にチャレンジすることにしました。限られた時間の中、専門学校でDVD講座に申し込み、2倍速でDVDを視聴し続け、一年半のコースを一年半で終え、腱鞘炎になつて、サポーターを腕に巻きながらデスクに向かつていました。

無事、本試験を突破した頃、大和総研で、あるミッションが動いていました。機関投資家投票のランキングが業界三位に転落したことを受け、それを一位にするというものでした。実現には、数々の施策が必要で、そのために人を外から登用しようというものでした。

私はこのご縁がつながり、テレビ局と経済記者の仕事を辞めて、大和総研に行くことを決めました。本当にやりがいのある、好きな仕事でしたが、この時の私には、どんな時でも家族を支えていくという大きな目的があり、新しい世界に挑戦することを選んだのです。

しかし、ここでも現実には甘くありませんでした。入社してみると、専任は私一人。新参者が新しいことを試みようとしても、受け入れられるはずがない。職場で完全に孤立しました。家族を支えようと転職をして、逆に支えてくれたのが、家族でした。

しかし、一生懸命仕事をしていくと、少しずつ理解してくれる仲間ができ、最終的にはチームができ、入社二年が過ぎようとしていた頃には、チームでミッションを

達成することができました。そこから業務の幅も広がり、企画、広報、人事、採用、社員研修といった広い経験を積み重ねてもらい、これが、まさに今、会社経営の礎にもなっているのです。

太郎さんの病状もちょうどこの頃、一年位、再発が止まり安定していました。

このタイミングを逃してはと、第二子を授かることができましたが妊娠がわかった翌月、太郎さんに癌の再発が見つかりました。すぐに手術をしましたが、この時にすべてが取りきれなかった、言い換えるならば、取りきれれる場所だけがでなかったことから、長男が誕生した半年後、太郎さんは亡くなりました。





杉村太郎氏 一周忌 散骨式

しかし、彼は、告知からの、与えられた七年半を全力で生き抜いたと思っっています。

「やりたいことは、次々と出てきてきりが無いと思うけど、やり残したことはない」こう、絞り出すような声で言っていたことを、今でも思い出します。そして、「会社をつないでいってほしい」と言われました。

夫であり、創業者であり、塾の創設者であり、若者のカリスマ「太郎さん」が亡くなってから

私が太郎さんと出会ったのは、1995年。その後ずつと、この人と一緒に、より良い社会を作っていくと無意識ながらに思いながら生きてきました。そんな力強いパートナーを、精神的にも物理的にも失った時、私は何を感じたか。寂しさ以上に、「彼の分も生きていかなくてならない」と強く思っただんです。

まず子供に対しては、「お父さんが死んだから、私たちの人生はこうなってしまった」とは絶対に言わせない。「お父さんはいなくなっただけれど、だからこんなに頑張れた」と笑顔で言えるように、私が彼

の分もしっかりと育てよう。

また、太郎さんにとって、彼を支えてくれたすべての方が、命の恩人であると、私は思っています。彼にとつて、残された時間を一緒に走ってくれた仲間が、生きる喜びであり、活力そのものでした。そんな命の恩人の方に、「太郎さんが亡くなったから人生が狂ってしまった」と思わせることだけは避けたかった。

彼らが笑顔でいられるためにも、最低限、会社は守らなくてはならない。そういう気持ちで自然とわき上がってきました。この私に何ができるかわからない。しかし、全力でやれば、何かできるはずだ。こうして、私は、太郎さんの遺志を継ぐ覚悟をしたのです。

一方、覚悟はしたものの、二児を抱え、どうしたら良いものか。両親に、何から何まで負担をかけるというわけにもいかない。色々な手続きで、役所に入入りする中、区のシルバー人材センターの広告を見つけました。

思い切って電話をし、数日後に、顔合わせが実現。そこで松田さんという素敵な女性とのご縁があ

りました。松田さんは70歳に近い方でしたが、昔、芸妓さんをされていたバイタリテイ溢れる素敵な方でした。「私がちゃんと面倒をみていますから、外に行かれる際には安心して、しっかりと活躍してきてくださいね」と0歳の息子を、しっかりと抱っこしてくれました。本当に頑張っていると、不思議なほどに、神様が「ご縁」という最高のめぐり合わせを与えてくれるのです。経験をするほど、挑戦するほど、多くの傷を負うかもしれない。しかしそこで初めて、人の痛みが理解できるようになり、その喜びがいかに尊いかを感じる事ができるようになります。思うのです。経験し、その経験から学び得たことは、その人の強さとなり、優しさとなる。傷だらけになっても、それを治していく過程で、確実に生きる力となる。そう思うのです。



私が考える自立までのプロセスを、今一度整理してみました。

- 1 まず、夢・目標をもつこと
それが、生きる原動力になります。そして、
一歩踏み出すことで、みえる景色が変わってきます。
- 2 次に、一歩踏み出した後、どんどん進んでいく。
苦手だと思いついていたことこそ、挑戦してみると、
更に世界が変わります。
チャンスの神様は前髪しかない、
チャンスの神様がこつちを向いてくれている時に、
その前髪を掴まないとはいけません。
- 3 せっかくチャンスを掴んでも、
すぐ離してしまつたら意味がありません。
掴んだら覚悟を決めて継続すること。
どんなに苦しくても、「絶対」を信じ続ける。
- 4 限界を決めるのも、また私たち自身なのです。
これらの過程で、傷つき、躓き、逃げ出したいと思つても
自分の力で克服し、自然治癒力を高めてこそ、
生きる力が身につくものだと思います。
- 5 最後に、多くを経験し、
自らが強く優しく成長する過程において
人は、必ず、多くの人に支えられているということですが、
常に、感謝の気持ちを忘れない。

私が目指していきたい、
自立する女性像とは

多くの経験から、人の痛み、そして
幸せを理解できる、強く優しい
人、傷を自分の力で治していくこ
とで、生きる力を身につける。

そして、難局を乗り越えること
にいかにも多くの人に支えられてき
たかを実感し、心から感謝する。

その上で、自らの意志と覚悟を
もって、主体的に生きていく女性
こそ、私は、真に自立する女性だ
と思うのです。

また、この主体的に、とは自分だ
けのこと、つまりは、利欲を求めて
生きていくのではなく、自分の周
りをも、自分が幸せにしていこう
という意志をもって、力強く生き
ていくことだと思っています。

自立とは、自らで立つというだ
けでなく、他者の幸せを願って、自
らの意志で主体的に生きていくこ
となのではないかと、私は考えて
います。これから先、私達の人生に
はどんな運命が待ち構えているの
か、図り知れません。

しかし、どんな時でも結局は、
自分の力でそれを乗り越えていく
しかない。そして、その時、自分だ
けが乗り越えれば良いというので
はなく、みんなで共に乗り越えて
いくのだ、そういった意識を一人
ひとりが持つことができれば、必
ず、運命は拓けていくのではない
かと思うのです。

自分の経験は、自分のためだけで
なく、誰かのためになる。
そう信じて、一歩踏み出してみる。
挑戦し、傷つき、生きる力をつけて
いく。
そこに、自立の意味があるのでは
ないかと思うのです。



野呂泰史先生との出会い ～ 感謝を込めて～



2011年に創業者の夫を亡くし経営を引き継いだ私は、大海原に漂う船の舵を必死に握りしめているような状況にいました。何としても船を傾けるわけにはいかない。船の調子が悪くても、何から手を付けていいのかわからない。そんな私に事業承継の道を示し、“可能性”という光を見せてくださったのが、野呂先生でした。

ある日「社長のための経営術」セミナーに参加した私は、「縁のあった会社は必ず成功へと導く」そして「この世から倒産する会社をゼロにしたい」という言葉に触れ、勇気をいただきました。迷うことなくコンサルティングを申し込み、後日、弊社まで来てくださったのが、野呂泰史先生でした。熱心に会社の状況をヒアリングされた後、過去7年分の財務分析を行い、わかり易い資料にまとめてくださったその内容から、私たちは経営課題を理解し、目指す方向性を見出すことができたと思っています。

その後、野呂先生の丁寧なご指導の下、裏付けある数字に基づいた経営計画を立て直し、順次アクションに移すことで会社がV字回復を遂げられたのは、私たちの自信にもつながりました。

また、野呂先生は単に数字だけを見ているわけではなく、常に“人”を中心に考えられ、私たち一人ひとりのこともよく見てくださっています。経営を通して、“人としての在り方”ひいては“道徳的な生き方”をも示してくださいます。

その教えは経営に限らず、私の判断軸になっています。

野呂先生に出会い

「杉村社長はこの会社をどのようにしていきたいのですか」と聞かれたその日から、常に野呂先生は私たちの傍で応援し続けてくださいました。



これからも会社のミッションである「人々の人生を輝かせる」そして「社会をより良い方向に導く」ことを通じ、目標の達成、夢の実現に向け邁進して参ります。

株式会社ジャパンビジネスラボ
代表取締役 杉村貴子

強くなければ生きていけない 優しくなければ生きていく資格がない

If I wasn't hard, I wouldn't be alive.
If I couldn't ever be gentle, I wouldn't deserve to be alive.

～ レイモンド・チャンドラー ～

その美貌もさることながら、美しい声としなやかに発露される日本語に魅了された30分。
フツーでは考えられないようなさまざまなことを経験された杉村貴子氏。
しかし、すべては偶然ではなく彼女が「YES!」と選んできたこと。
主体的な選択の一つひとつには、強く美しい意志と、優しい気持ちが詰まっている。



一步踏み出すことには勇気がある。

挑戦したからといって、すべてがうまくいくわけではない。

傷を負わずにチャレンジを続けることはできない。

そして、壁にあたってもお継続することにはタフな身体と心が必要だ。

しかし、そうやって、前のめりに生きている人には、必ず「縁」がやってくる。

その「縁」を大切に、感謝をしていると、次のチャンスがやってくる。

意志を持って主体的に生きる人にだけ、

運命が拓けてくる。



働くすべての女性に一。

「YES!」「YES!」「YES!」

(まつ)

